僕の姿が見えるとき

想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の姿が見えるとき

【Ｎコード】
Ｎ３１２４Ａ

【作者名】
想

【あらすじ】
何の取り柄もない太一が盲目の少女、舞と出会い人生を変えていく。あらゆる障害を２人で乗り越えていくが、ついに２人に乗り越えることのできない壁が…。そして太一はある決心をする。盲目の少女とそれを支える少年の淡く悲しい恋愛ストーリー。

第一章：願い事～出逢い

人間には翼がない。もちろん僕にも。そして君には光がない。光を感じることができないんだ。つまり君の目は、街の灯りも行き交う人の群もゴミをあさるカラスも素敵な景色だって全然見えないんだ。彼女の名は藤井舞。

初めて彼女と出会ったのは僕が高校一年生のとき。

僕は学校の交流行事で隣り町の盲学校へ合宿コンクールで歌った唄をすることになりクラス全員で訪れた。

僕は正直、めんどくさかった。まだ思考が子供だったのと少しヤンチャだったからサボってしまおうとも思った。でも担任はそんな事許してくれる筈もないし、渋々行くことにした。県立西盲学校は全部で３０人程度の比較的小さな養護施設だった。小学一年生から高校三年生まで割と幅広い子供たちがそこで共同生活しているのだ。

「おはようございます」

クラス全員で挨拶した割にすごく小さな声だった。でも返ってきた挨拶に僕は驚いた。

「おはようございます！」

僕たちの何倍出ていただろう？それくらい大きな声で挨拶をしてくれたんだ。それは僕が予想していた何倍も…。盲学校長の挨拶が終わり、早速僕たちは歌を披露することになった。『翼をください』　まあ定番中の定番の曲を選んだもんだ。でも何故だか僕は挨拶で小さかったせいかすごく歌いたくなった。　指揮の手が挙がり伴奏がそれに続く。

「今～私の～――――」

気が付けば必死に歌っている自分がそこにはいた。

そして盲学校生から大きな拍手があり、クラス何名かずつで花束贈呈があった。その後、盲学校生の代表の言葉になった。

「西盲学校生代表、藤井舞」

「はい」
その返事はとても透き通った声だった。
「県立南高校の皆さん、今日は素晴らしい曲を演奏してもらいありがとうございました。歌ってくれた曲の中の人物は願いが叶うなら翼が欲しいと言っていました。私たち全盲の人間にとっては願いが叶うならあなたたちのように普通の生活をしあらゆるものを”見る”ことを願うと思います。私たちは常に闇です。でも今日の演奏を聴き、頑張れそうです。南高校の皆さんも何事も諦めず頑張ってください。終わります。」
僕は鋭いナイフで心をえぐられたような気持ちになった。でもその言葉一つ一つが僕を変えさせてくれた。そしてその言葉をくれた盲目の彼女に惹かれていったんだ。

第一章：願い事～出逢い（後書き）

はじめまして。想といいます。この作品が自分にとって初めての作品になります。まだ不慣れですがどうかアドバイスなどありましたら是非ともお願いします。でわごゆっくり…

第二章：急性緑内障～指切り

それからの僕は度々、盲学校に通った。盲学校教諭ともなんか知り合いみたいになった。
「太一くんまた来たのかぁ？舞ちゃんがお気に入りかい？」
紹介送れたけど僕は”浅見太一”　ありふれてあまり好きじゃない。
「こんちわ。舞ちゃんいますか？気になってなかったら来ないっすよ。今日はちょっと話したいなと思って。」
これが僕と彼女とのファーストコンタクトの日だった。白い杖でゆっくり先生に引き連れられて彼女はやってきた。
「こんにちは、舞です。」

ちょっと高くてか細いけどしっかりした声をしていた。
「こんにちは、前に歌を唄いに来た南高校の…浅見太一ですっ！」
あぁあ、緊張して声うわずっちゃったよ。しかも名前言うの戸惑っちゃったし…。
「この前の…でもなんでいきなり…？」
彼女は驚いた様子で質問してきたんだ。すかさず僕は
「あの舞さん…あぁ藤井さんのあの代表の言葉、あれすごい心動かされたんです。なんて言うか…本人と直接話してみたいっていうか…あの…そのぉ…」
「舞でいいですよ。でもなんか嬉しいです。そうやって言ってもらえて。」
僕はすごく高揚した。他愛ない話をたくさんして、どれくらい話をしたのかわからないくらい話した。それはまるで普通の女の子と話をしているのかのように。でも彼女のこの話で一気に現実へと僕を回帰させた。
「私ね、5歳まで普通に見えていたんです。動物園や水族館が好き

でペンギンとかイルカとかキリンとかライオンとか。幼い記憶なんかそんなのばっかりなんです。でもある日猛烈に両目が痛くなって病院行ったら児童急性緑内障だったらしくて。それから1ヶ月くらいで完全に真っ暗になっちゃったんです」

その後もいろいろ話してくれたけど正直あまり覚えてない。緑内障という言葉が頭をぐるぐる回っていた。　気付けば僕は、ただうなづくだけで何を行ったらいいのかわからなくて黙ってしまったんだ。5歳から途切れた少なすぎる映像の記憶。五体満足の僕には到底理解など出来る世界じゃなかった。

それから僕は高校を卒業するまでの二年間、彼女に会いに通い続けた。

盲学校では高校の過程を終えると一時自宅へと帰ることが出来る。南高の卒業式が終わり、みんなとの別れも半端にして僕は、盲学校へと急いだ。卒業式の日にちが一緒ということもあり、僕は彼女と少しデートした。そこで僕は、色々なものがどこに置いてあるのか、どんなものなのかを説明しながら彼女の目となり行動した。その帰り…

「今日はありがとう。でもこんな私に優しくしてくれるのはなんで？」

彼女はやはり障害を持ってることで自分をふさぎ込んでいた。

「舞ちゃんに元気になってほしかったから。笑顔見てると嬉しくなるし。そうだっ！今度、水族館行こうか？俺一つ一つ説明するし！ねっ？」

無理な誘いなのは分かっていた。

「でもお母さんが許さないかも。盲学校の先生も付き添いならいいけれど…」

「じゃあ付き添いで行くって言えば？きっとお母さんも許してくれるよ！」

僕は必死だった。少しでも一緒にいたかった。何より彼女の側にい

たかった。
「話してみます」
「じゃあ今度の日曜日駅前にしよう！もし舞ちゃん来なかったら、それはダメだったってことで諦めるからさ」

「分かりました」
僕は彼女の小指を自分の小指に絡ませて指切りをして、そして別れたんだ。
家に帰り、僕は親にビデオを借りた。彼女には見れないかも知れないけど撮りたかった。思い出を残したかったんだ。日曜日が楽しみだった。

第三章：弱者～彼女の言葉

そして日曜日。
僕は駅前にいた。
気持ちは複雑だった。
来なければもう一生逢えないような気がした。
彼女と出逢って以来、色々自分が変わった。
煙草も辞めたしバイトだって始めて真面目になったつもりだ。…ゴホンっゴホンっ。今日は寒いなぁ　今日は外が寒いせいか咳がよく出る。ゴホンゴホンっ　　何分かすると向こうの方から盲学校の先生と３０代後半くらいの女の人に挟まれて歩く彼女がいた。赤いダッフルコートに白いロングスカートですごく可愛く見えた。すると傍らの女性が話し掛けてきた。
「舞の母でございます。私は最初この話を舞から聞いたときは驚きました。すごく反対したんですが舞が初めて誘われたし行きたいと言うので連れてきました。この子は知っている通り全盲です。色々迷惑かけますが先生も付いてくださると言うので…」

すると先生もそれに続いた。
「太一くん、私が付き添うのは絶対条件だよ。いいね？」
以前この先生と話したときに名札を見た。確か…千葉直樹先生だ。
千葉先生の問いにうなづいた僕は彼女の母親と別れ、３人で水族館へ向かった。

水族館までは先生の車で行くことになった。駅から水族館までは３０分くらいかかっただろうか。他愛ない話をしながらだったから時間は短く感じたんだ。到着し、二枚分の入場券を買って入ると従業員が話しかけてきた。
「お客様、車椅子ご利用になりますか？」

すると千葉先生は
「お願いします」
と返答した。人数の多い施設では杖は危なく、車椅子の方が安全みたいだ。彼女が座っている間、千葉先生が
「三人で館内回るのは嫌だろ？俺は後ろからついて行くから行きな。ほら押してあげて」

僕は目でありがとうを言った。　車椅子のグリップをギュッと握りしめ、僕たちのデートは始まったんだ。
「私ね、このにおいが好き。このざわついた喜ぶ声も好き」
　彼女は目で感じられない分、耳や鼻で感じているんだ。僕には当たり前なこのにおいや音は彼女にとってはかけがえのないものなんだ。親から借りたビデオを撮りながらそう感じた。僕は一つ一つ水槽の前で説明をした。　そして一番行きたかった場所へ彼女を促した。
「舞ちゃんはイルカが好きなんだよね？イルカのところ行こうか？」

僕は車椅子を押しながらビデオを撮り続けた。彼女もなんだか楽しそうに思えた。　でも周りの目は予想以上に冷ややかだったんだ。
「ねぇお母さーん、あの人なんで変なとこばっか見てるのぉ？」
　「こらっそんなこと言わないの！お姉さんお病気なんだから…」
　「あれ？あの子なんか目線おかしくね？なんで見えないのにここ来てんだ？ハハハ…」
……　「私、こういうの慣れてるから。障害があることは弱者なんだよね。でもそんなことといちいち気にしてられないし…今日はせっかくここに来てるんだし楽しみたいんだ。」

彼女の言葉一つ一つが心に染みた。僕はこんな子に何を楽しませてあげられるだろう…　そんなことばかりが頭をよぎった。

第四章：覚悟～舞という存在

ペンギンがスイスイと泳ぐトンネルになった水槽を抜けるとイルカのいる大きな水槽がある。そこに着くと彼女は水槽に耳を当てながら目を瞑りこう言った。

「こうしてるとね、イルカが泳ぐ姿が私のまぶたに浮かんでくるの。かわいいね…。」

「うん。イルカって人間よりも頭がいいんだって。舞ちゃんの思うイルカぁかわいいんだろうね。」

僕は複雑だった。今目の前を泳ぐイルカの姿を目を瞑って感じている彼女でも想像でしか見ることの出来ない現実がある。

「舞ちゃん、少し休憩しようか。俺ジュース買ってくる。すぐ戻ってくるから。」

僕は急いで買いに行った。彼女から離れてしまったんだ。

「ねぇお姉ちゃん。僕のこと見える？僕のこと触ってみて、アハハ…」

小学生くらいの少年三人が彼女に声をかけた。

「君たち、まだ声が幼いね。小学生くらいかな？」

彼女の問いを振り払うようにもう一人の少年が言った。

「うるせえなあ。見えるんだったら触ってみろよ。ほらほら！」

少年たちは彼女を挑発した。彼女は無言のまま、杖も何もない体を車椅子からゆっくりと立たせていく．．．．．

「ガシャンっ！！」

それはあまりに大きな音だった。彼女は車椅子ごと転倒して床に頭を打ってしまった。

「うわっやべえよ。とりあえず逃げようぜ。」

少年たちは彼女を助けることなく逃げてしまった。

「大丈夫かい？！」

後ろから付いてきた千葉先生が痛がる彼女の元へと助けにやってきた。

自動販売機が置いてある場所が意外と遠く少し遅れて、ジュースを二本持って彼女の場所へと戻ると、そこには彼女の姿はなかった。すぐ近くにいた従業員に、「ここにいた車椅子の女の子はどこ行ったかわかりますか？！」

と聞くと「救護室に行きましたよ」

と言った。救護室？　何が起きたんだろう？　混乱しながら救護室へと走った。

息を切らし救護室へ着くと、そこには千葉先生が腕を組み立っていた。

「あの…舞ちゃんは…？」

「ちょっとこっち来なさい！」
僕は言われるがまま喫煙所へと腕を引っ張られ促された。
「太一くん、なんで舞ちゃんから離れたんだ？！」
千葉先生は酷く激高していた。僕は即答した。
「ちょっと休憩しようって言ってジュースを買いに…」
すると千葉先生も即答した。
「ダメじゃないか！車椅子で目立つのは子供の恰好の餌食なんだ。一人にさせたら必ずちょっかいを出しにくるんだよ。何が起こるとも限らないのに離れるなんて。君は今日どれ程の覚悟で来たか知らないがあの子の側にいるっていうのはそれだけ覚悟しなくちゃいけないものなんだよ。」
初めてだった。千葉先生のこんなに怒った姿を見るのは。僕はただただ謝るだけだった。
「太一くん、僕が言わなかったのも悪いなって思ってる。でももし君が舞ちゃんの立場なら怖くないかい？一人で待つの。舞ちゃんと一緒にいたいってことはそれだけの考えと覚悟が必要なんだよ。君にその覚悟がないなら…」
「ありますっ！！僕は彼女を初めて見てあの言葉を聞いたときから、それに直接話していくうちに覚悟していました。彼女の目にいつかなりたいってずっと思ってました。それはずっと出会ったときから変わっていません！」
本音だった。僕もこんなに必死に話したのは初めてかもしれない。そんな軽い気持ちで今日ここにいるわけでもなかった。彼女を本気で好きだから、一緒にいたいから…。

「…そうだよね。ごめん。太一くんがそんな人なわけないよね。舞ちゃん車椅子から転んで軽く頭を打っただけみたいだから。心配ない。今日はもう帰ろうか一応ね。」

僕は緊張から安堵に変わっていく自分にやっと気付いた。でも僕は彼女の前でどんな顔をしてればいいだろう。どんな言葉を言ったらいいだろう。

未熟すぎる子供な自分が惨めで情けなくて、ふと涙が出た。

第五章：普通の人～ごめんね。（前書き）

「ごめんね。」　この言葉はすごい要素を持つ。彼女の優しさ、そして苦しさ。太一はあることに気づく。

第五章：普通の人～ごめんね。

「一応、応急処置はしましたから。おでこを擦りむいた程度なので大したことはないと思いますが念の為、病院で脳の検査をした方がよろしいかと思います。では。」

館内に常駐している救護室の医師はそう僕らに告げた。それに次いで、車椅子に乗った彼女が診察室から出てきた。

「千葉先生、ご迷惑をおかけしました。もう平気です。」

彼女は額に白いガーゼを当てられていた。そして千葉先生が頷きながら言った。

「今日はとりあえず帰ろうか。救護室の先生も一応病院に、って言ってたからね。」

「はい…。」

彼女のその返事はどことなく元気がなかった。そんな彼女に何も声をかけてあげられずに、水族館の駐車場へ歩いていった。その間、彼女は一言も発することはなかった。

車に乗り込み、僕と彼女は来たときのように隣同士で座った。何か言わなきゃと僕は思っていたがなかなか思い付かない。　そのとき…

「太一くん、ごめんね。私がこんなだから最後までいれなくて。太一くんは何も悪くないよ。私が悪いんだから…気にしないでね。」

驚いた。彼女に下の名前で呼ばれたのは初めてだった。彼女は僕よりもうんと大人だった。

「ううん。俺が悪いんだ。舞ちゃんから離れちゃいけなかったのに…迂闊だったんだ。ごめんなさい。舞ちゃんまた来よう。また。」

これが彼女に言える最大の謝罪と慰めだったのかも知れない。

「太一くん、謝らないで。太一くんのいいところはね、私のことを”普通”に”見て”くれてるところだよ。普通の女の子みたいに会話してくれて、行動してくれて。私、すごく嬉しいんだ。だから休憩してジュース買ってきてくれることも普通だよ。だから私が全部悪いの。また来たいな…太一くんと。」

僕はやっぱり彼女のことを軽く考えすぎてたのかも知れない。僕以上に彼女は僕のことを見てくれていたんだ。僕は、自分の弱さを痛感した。

「必ずまた来よう。舞ちゃんとまた来よう！」

「うん…必ずね。」

彼女は僕の方を向いて笑顔を見せた。僕はすごく嬉しくて彼女をずっと見つめていた。

「もうすぐ舞ちゃんの家に着くよ。用意しておいてね。」

千葉先生の言葉で僕らは窓の外を見た。もう辺りは薄暗くなっていた。携帯電話の時計を見るともうすぐ１８時になるところだった。彼女といるといつもこうだ。こんなにも時間が早く感じる。

「今日は迷惑かけちゃったけどすごい楽しかった。」

「うん。俺もすごく楽しかった。また誘っていいかな？」

「うん…。私なんかといて楽しい？」

彼女はまだ僕に完全に心を開いてくれない。

「もちろん。すごく楽しくて時間が早いんだ。そうだ。舞ちゃんのうちの電話番号教えてよ？」

彼女をまた誘うために聞いてみた。

「…また誘ってくれる？」

僕は答える。

「うんっ！」

僕は彼女の電話番号を携帯電話に登録し、彼女の家に着くのを2人で待ったんだ。

第六章：マイナス～僕の偽心

彼女の家に着き、僕は千葉先生と共に彼女の母親にお詫びをしなくてはいけなかった。二階建ての比較的新しい感じの木造一軒家だった。”藤井”という表札の付いた門扉の前でインターホンを押す。

「はい。」

「こんばんは、千葉です。今、帰りました。」

「お待ちください。」

すると玄関のドアが開き、彼女の母親が出て来た。そして彼女の額に付いた白いガーゼを見て母親は、驚いた様子で言った。

「舞、どうしたの？！怪我してるじゃないの！とにかく上で休んでいなさい。先生これは…？」

すると先生ではなく彼女が先に口を開いた。

「お母さん、心配しないで。ちょっと車椅子から転んだだけだから。部屋行くね。今日はありがとうございました。」

そう言うと階段の手すりを掴んでゆっくり登って行った。そしてここで千葉先生がやっと口を開いた。

「そのことで少し話をしたくてこちらまで伺いました。よろしいですか。」

「えぇ。どうぞ。」

僕たち二人はそのまま家の中へと通された。

奥の和室、七畳くらいはあるだろう。中央には木目のテーブルに座布団が四つ規則正しく並んでいる。そこに正座した僕たちはまず千葉先生が今日の経緯を母親に説明した。

「今日、館内で舞さんは車椅子を使用しました。ホワイトステッキで歩くと思わぬ事故が予想されるためです。そして私は、二人の後をゆっくり追いながら監視していました。
太一くんが休憩しようと言って、ジュースを買いに出かけ舞さんは一人になり、そこで話しかけてきた子供たちに立つことを強要され車椅子から転倒しました。幸い大事には至らずに額に擦り傷でした。頭を軽く打っているので明日念のため病院に行きましょう。しかしこのような事態になったのも、全て私の監督不行き届きが招いた事です。責任は全て私が…。」
「ちょっと待ってください！！」

僕は千葉先生の発言を中断した。

「今回このようなことになったのも、僕が舞さんから離れて一人にさせてしまったからで…責任は僕にあります。…すいませんでした！！」

今日僕は何回謝っただろう。でもその謝罪の気持ちに嘘はない。

「…そうですか。もとはと言えば私が行かせたのも悪かったんですよね。任せてしまったのですから…。」
母親はそう言うと、さらに続けた。

「私の夫…つまり舞の父は舞が病気になってから出ていきました。それからの私の生活は舞中心になっていきました。全盲になったときはショックでしたが今まで大切に育ててきたつもりです。だから

ね…太一くん……もう舞とは会わないで欲しいの。舞は今大事な時期で、更に今回のことですごい不安で仕方ないのよ。太一くんにはこれ以上迷惑かけられないし、舞もきっと歯痒いはずよ。だからもう正直言うと会って欲しくないの。」

僕は彼女の母親の言葉が信じられなかった。信じたくなかった。彼女のいない三人の空間は、今まで感じたことのない緊張感だった。すると千葉先生が慌てて話し出した。

「お母さん、違うんです。太一くんは何も悪くないんです。僕が見ていなかったばかりに…。舞さんは太一くんと出会って以来、よく笑うようになったし、明るくなったんですよ？」

先生のその言葉はすごく暖かかった。

「でもこのままではお互いのためになりませんよ。これから大人になり一人で行動することも増えますし、網膜のドナー捜しもしなくてはいけません。舞と合致した網膜が見つかれば、移植手術も考えているんです。私は舞の母親ですから、一番舞のことわかってるつもりですよ。」

もはや僕に選択肢はなかった。本当はこんなこと言いたくなかった。

「分かりました。もう僕は舞さんと会うのはやめます。僕と会うことが舞さんにとってマイナスなら会えません。お母さん、今まで本当に迷惑かけました。この数年間、僕はすごく楽しかった。今日は本当にすいませんでした。」

本心なわけがなかった。本当はもっと会いたいし、もっと話したい

し、もっと側にいたかった。でも彼女も同じ気持ちなら、それは仕方のないことだった。

「それでは夜遅くまで失礼しました。明日、病院の方には私も同行しますので、また明日伺います。それでは。」

「お願いします。それでは。」

僕はドアが閉まり、玄関の明かりが消えても、深く下げた礼を正すことができなかった。今になって涙が溢れてきた。その涙が履いているスニーカーにポタポタと落ちていく。

僕はこうして彼女と会えなくなってしまったんだ。

第七章：親～気持ち

４月になり、僕は新しい世界に足を踏み入れる。必死に勉強して入学を決めた専門学校だ。そこは介護福祉の専攻で盲学校や聾学校の教諭資格も取得することが出来る。今日はその専門学校の入学式なのだ。彼女と会えなくなって１ヶ月以上が過ぎ、それでも時間は止まることを許してはくれないんだ。

「舞さんと会うのはやめます。」

そう告げた日から僕の時間は止まったままなのに…。

長ったらしい入学式が終わると、入学の資料やクラス分けの紙、学生証などが入った大きい封筒を受け取り、その日はそれだけで終わった。僕の両親は僕が介護の専門学校に行くのをとても喜んだ。でもそれを志した理由を聞いてからあまり両親との会話はなくなっていた。志した理由…それは彼女だった。

家へ帰ると珍しく父親がいた。

「太一、入学式はどうだった？人はたくさんいたか？」

父親がそう言うと僕は　「あぁ。」

そう答えた。すると父親が

「あの全盲の子とは会ってないのか？」

親の方から彼女の話をするのは初めてだった。

「あぁ。もう会うなって彼女の母親にね。」

僕は忘れたかった。なにもかも全てを…

「なぜ会うなって言われたんだ？」

父親が続けた。僕もそれに続く。

「彼女は色々と大変なんだよ。会ってる暇なんかないんだってさ。」

僕はそう言うとまた父親が続けた。

「そうか。でもその彼女の気持ちはどうなんだ？」

僕は答える。

「彼女は俺に会う度歯痒い思いしてるんだって。何より彼女のためにならない、母親の私が一番理解してるって。」

そういえば父親とこうして本音で話すのは久々かも知れない。

「でもそれは母親のエゴだろ。彼女の直接的な意見じゃないだろ。確認もしないで彼女の気持ちは置き去りか？」

父親はなぜか真剣だった。その言葉は心に突き刺さった気がした。でも現実は会えないんだ。今さら気持ち聞いても彼女の母親はまたきっと会うなと言うだろう。余計つらいだけだ。

「なぁ太一、もし彼女に気持ちがあるならきっと連絡が来るはずだ。お前が諦めて気持ちに嘘ついたら彼女はどうなる？」

父親は真剣だ。

「だからお前は絶対気持ちに嘘付くな。好きなら待ってやれ。」

僕は素直に聞き入った。そんな姿を悟られないように笑いながら父親に言った。

「気持ち悪りぃよ親父。」

僕にとっては彼女は特別な存在だった。目なんか見えなくても関係なかったんだ。でももし彼女が僕の姿が見えるとき、どんな気持ちになるだろう。好きな気持ちなんて本当は彼女にないかも知れない。でも父親の心からの言葉に僕は妙な説得力があるように感じたんだ。

「彼女に気持ちがあるなら必ず連絡がある。」

この言葉を信じてみようと思う。とりあえず明日の初登校日の準備をしながら僕はずっと父親の思い、彼女の気持ちをかみしめて眠ったんだ。

第八章：涙～本当の気持ち

「舞ー、起きてよーご飯だょ。」

朝とは到底思えない大きな声で起こされた舞は、手すり付きの階段を手馴れたように降りていく。今日は週に一度の検診の日だった。母と朝ご飯を食べていると舞は言った。

「最近、太一くん来ないね。風邪でも引いたのかな。」

母は黙って聞いていた。

「仕事始まって忙しいのかもしれないね。」

舞はそう言うと手探りに目の前の卵焼きを箸で掴んで食べた。あの日以来、母は太一との”決め事”を舞に言えずにいた。

「元気にやってるんじゃないの。早く食べてよ。」

そんな素っ気ない母の態度に舞は何かを察した。

「私が怪我をして帰ってきた日、下で何か話してたよね？何話してたの？」

母にとっては思ってもみない”言える”チャンスが訪れた。

「あの日ね、お母さん太一くんにお父さんのこと話したのよ。」

母は遠回しに話の経緯を話し始めた。

「舞はもう立派な大人よ。そろそろ将来のこと考えなくちゃいけないのよ。」

舞は真剣に聞いていた。

「太一くんには悪いけど…舞のためを思ってね、もう会わないでって言ったわ。」
すると舞は驚いたように言った。
「えっ？それで太一くんは？」
母が答える。
「僕と会うことで舞の障害になるなら会いたくない…って」
舞は下を向きながら言った。
「ねぇ、なんでそれが私のためなの？太一くんは私がつらいときや苦しいときいつも一緒にいてくれたのよ。」
母は悲しそうだ。そして舞の声もどことなく悲しげだった。
「私は太一くんのお陰で成長できたの。これからももっと成長できるって…そう思ってたのに…」
舞の本当の気持ちを母は初めて知った。何よりこの舞から流れる涙がとてもリアルだった。
「私の気持ちどこ行っちゃうの？もうお母さんなんか嫌いっ！」
「舞っ！」
舞は自分の部屋へと入ってしまった。母は自分のしたことが舞を逆に傷つけてしまったことに気付いた。でも母は会うなと言ってしまったために、何もすることが出来なかった。すると母は何か思いついたように傍らの受話器を取り出した。
「はいもしもし、県立西盲学校ですが」

事務の人らしき女の声が聞こえた。
「以前お世話になった藤井舞の母ですが…千葉先生はおりますでしょうか？」
「はい。少々お待ち下さい。」
保留音が流れる中、それを切り裂くように爽やかな声が聞こえた。
「はい千葉です。これは舞ちゃんのお母さん。どうかされました？」
電話の声はやはり少し心配そうだった。
「お久しぶりです。あの…今日、舞の太一くんへの気持ちを知りまして…」
母はさらに続けた。
「やはりあの子には彼の存在が必要なのではないかと…」
それは紛れもなく本心だった。
「そうですか。ほぼ毎日のように太一くんはここへ来て舞ちゃんと会ってましたし、苦楽を共にしてましたからね。」
太一は舞にとってとても大きな存在だった。
「それで…お願いなんですが…」
母は本題へと入る。
「なんでしょう？」
千葉先生が聞くと母が答えた。
「太一くんの携帯番号を教えていただけないでしょうか。」

母の舞に対するせめてもの償いだった。
「いいですよ。舞ちゃんの声聞いたら太一くんも忘れてしまいますよ。番号は…です。」
「ありがとうございます。」
母が感謝を告げ電話を切ると、番号の書いたメモを手に舞の部屋へ向かった。
「舞、ごめんね。太一くんへの気持ちがこんなに強いの知らずに。私の存在以上に太一くんは大きいのね。」
母は泣きながら言う。
「舞が太一くんと会ってから明るくなって笑顔も増えたものね。私はただその笑顔を無くしてほしくないわ。だから今から会いに行きなさい。」
すると舞はドアノブを捻り母の前で言った。
「お母さん、いいの？でもどうやって…？」
すると母はメモを取り出し、舞を電話の前に連れて、ダイヤルした。
「舞が直接電話しなさい。」
舞は受話器を持ち、そこからは呼び出し音が響いていた…

第九章：電話～すれ違い

僕は今日は学校の実地学生研修の日だった。
「……浅見くんちゃんと聞いてますか？！」
やっぱり人の話を聞くのは苦手だ。それに名字で呼ばれるのはもっと苦手だ。研修中は覚えることも山積みで本当に大変だ。
「じゃあ少し休憩を入れましょう。」
研修担当教諭の斑目先生は３５歳の独身男。この仕事をしていると結婚なんかしてらんないと以前言っていた。休憩室で缶コーヒーを飲んでいるとポケットに入っている携帯電話が震えた。折り畳みの携帯を開き画面を見てみると
『着信中　千葉先生』
と表示されていた。なんだろうと思い、徐に電話に出てみた。
「はい、もしもし。」
すると聞こえてきたのは紛れもなく千葉先生の声だった。
「久しぶりだね太一くん！元気？」
丁度休憩中だったこともあり少しだけ近況報告をした。
「それでね太一くん。今、舞ちゃんのお母さんから電話があって…舞ちゃんが太一くんに話があるからって太一くんの番号教えてって言われたんだ。」
僕はびっくりだった。いきなりすぎだった。そしてさらにその続きを聞いた。
「それで教えたんだけどさ、きっとそのうち電話かかってくると思

うよ。」
僕は戸惑っていた。
「でも…」
僕の言葉を振り払うように先生は言った。
「だから今度こそ素直に舞ちゃんに自分の気持ち伝えるんだよ。」
そう言うと仕事戻るからと言って電話を切った。突然のことでよく状況が把握できなかった。
「舞ちゃんが話したいこと…？」
直接さよならを言われるのかな。僕には皆目、検討がつかなかった。
「はいっ！じゃあ研修生は集まってくださーい！」
斑目先生の声が聞こえた。それは講義に戻ることを意味した。頭が混乱したままだ。
「では、次は介護者の方を実際に乗せてみて、車椅子の研修に移りましょう。」
この研修は実際にどのように動かしたり自分が動くのかを教えてもらう基礎講習だった。
「まぁまず乗せるときは……。」
これも将来のためならと細かいところまでメモしていきながら聞いた。１５分程講習したあと、
「そして車椅子では絶対にしてはいけないことがあります。」
しっかりメモの準備をして聞く耳を立てた。
「一つは目を離してしまうこと。そしてもう一つはその場から離れてしまうことです。」

うん…？どっかで聞いたことがあった。
「体の不自由な方はもちろん、目の不自由な方の時は特に、その場から離れては絶対いけません。私達は介護者の目となるわけですから。」
懐かしい響きだった。というよりあの水族館での出来事が頭を一瞬でいっぱいにした。すると突然、僕の携帯がまた震えだした。
「誰ですか？研修中は電源は切っといてくださいよ！」
急な出来事だったために僕は慌ててポケットの中に携帯を入れたまま電源を切った。
「他にも携帯持ってきてるのはしっかり電源切っといてくださいよ！」

僕を含めた研修生全員が返事をし、何事もなかったかのように斑目先生が講義を再開した。
「まあとにかくどんな状況下においても離れてしまうのはよっぽどのことがない限りしてはいけませんよ。」
沈黙の中、メモをとるペンの音が響いた。

「はいっ！じゃあ今日の研修はこれで終わりです。明日も朝から研修講義ですのでしっかり勉強しといて下さい。」
僕と他の生徒が返事をし、研修は終わった。
「なあ太一。今日バイトないなら飲みに行こうぜ！」
声をかけてきたのはこの学校で初めて出来た友達の安田だった。
「たまには行こうかな。」
そして僕たちは学校の最寄りの駅前の居酒屋へ入った。

席につくや否やいきなり安田は口を開いた。
「あのさあ、今度短大生と合コンするんだけど来るか？」
それは女好きな安田の合コンのお誘いだった。
「合コンかぁ…俺そういうの苦手だしいいや。」
なぜだろう。前の僕ならきっと真っ先に食いついてた話だった。
「なんだそりゃ～。お前、彼女持ちだったっけ？」
まだ友達になって浅いからか、そんな話もしていなかった。
「いないよ。好きな人はいるけど。見る？」
そう言うと僕は携帯でさりげなく撮った彼女の写真を見せたくて、
ズボンのポケットに入れっ放しだった携帯を取り出した。
「やばいなあ。あん時から電源落としっ放しだ。」
すぐに電源を入れると、
『着信あり　一件』
の文字が出ていた。
「ああ。講義中にかかってきたやつか。」
そう思い着信履歴を見てみるとそこには
『舞ちゃん』
そう表示されていた…

第十章：告白〜月日

僕の気持ちはまた急速に回りだしていた。

その日、安田に事情を説明して帰らせてもらった。家に着き、改めて自分がやってしまったことに苛立ちを感じた。彼女が一人では電話できないこと、勇気を振り絞ってかけてきてくれたこと、それが彼女にとってどれだけ大変だったのか一番よく知っているはずなのに…。

もう戸惑う必要なんてなかった。携帯の着信履歴の画面を出し、通話ボタンを押した。

「…はい。藤井でございます。」

出たのはもちろん彼女の母親だった。

「あの…太一です。昼頃に電話もらって…」

僕は急に気が引けてしまった。

「そうですか。こんばんは。今、舞と変わりますね。」

そう言うと電話が保留音になった。僕は胸がはちきれそうになっていた。きっと直接さよならを告げられるのだろうか。マイナスの思考が包み込む。すると保留音が聞き慣れた彼女の声に切り替わった。

「もしもし…舞です。久しぶりだね。」

初めて会ったときに聞いた代表の挨拶。その声のままだった。

「久しぶり…だね。ごめんね、電話出れなくて。」

僕は心なしか緊張していた。

「ううん。いいんだ。仕事だよね？」

僕は思った。そういえば進路の話をあまり詳しく話してなかったなと。彼女は僕はもう就職しているんだと勘違いしていたんだ。

「そういえばあまり話してなかったよね、進路のこと。僕今、養介護の専門学校通ってるんだ。」

彼女を驚かせようとずっと黙っていた。言うチャンスがなくなって会えなくなったから言えずにいたんだ。

「そっか。急に電話してごめんね。」

彼女は謝ってきた。何故だろう。僕の中ではさよならを言われる準備も覚悟も出来ていた。

「大丈夫だょ。それで…話って何かな？」

少し冷たく言ってしまった。でも次の彼女の言葉に驚かされたんだ。

「あのね…今日お母さんから水族館の夜のこと聞いたよ。私だけ何も知らなくて。私…太一くんに会いたかったんだよ。」

僕は心臓が口から出てしまいそうなくらいに言葉を失っていた。

「私にはね、太一くんがいてくれないとだめなの。もっと一緒に成長したい…。」

彼女の精一杯の言葉を僕はしっかり聞いていた。

「今日、お母さんと話して気付いたの。私…太一くんが好きなの。」

電話の向こう側の彼女の声は泣いていた。僕は今言える自分の気持ち全てを言おうと思った。

「ありがとう。てっきりさよなら言われるのかと思ったよ。」

電話で告白なんてしたことがなかったから声が震えていた。

「僕は、舞ちゃんと出会って、自分を変えることが出来たんだ。」

一つ一つ言葉を選んだ。自分の本当の気持ちを伝えたかった。

「これからもお互いがそうでありたいんだ。ここずっと会えなくて気付いたんだ。僕も舞ちゃん好きなんだなって。」

何年間もずっと言えなかったこの言葉がこんなにも簡単に言えた。言った瞬間に何かがスッと肩から落ちていった気がした。

「太一くん…これからも会ってくれますか？」

泣きながら聞いてきた彼女に僕は、

「もちろんっ。僕で良ければ。」

僕は幸せだった。二人が同じ気持ちだったこと、それ以上に本当に好きな人に

「好き」

と言えたこと。僕にとって人生で一番幸せで嬉しい日になっただろう。これから二人で共に成長していきたい。そう心の底から思った。出会って三年以上の月日がやっと二人を繋いでくれたんだ。

第十一章：余韻

僕の胸はすごくスッキリしていた。お互いの気持ちが通じ合ったことは僕にとっては信じられないくらいだった。僕は彼女を必要としているんだ。それに気付いたのは、やはり会えなくなってすぐだろうか。彼女も電話で同じことを話してくれた。

「あのね、私が太一くんを必要だなって思った時ね、…きっと意外すぎて驚くよ。」

少し笑いながら話す彼女の声はとても楽しそうだった。

「それはね、水族館で私が車椅子から落ちたときなんだ。」

僕は驚いた。僕の中では二人の思い出の中では一番いやな思い出だった。でも彼女にとってはそれは一番といってもいいほど印象深い思い出だったんだ。

「あのとき、太一くんにいてくれたらきっとこんな風にはならなかっただろうな、って思えてすごく大切に思えたんだ。」

嬉しかった。今までその出来事はいやなことでしかなかったのに、それが彼女の言葉で変わった気がする。電話を切ってもう数時間も経つのに眠れないし、その電話のことを何回も何回も繰り返し思い返していた。そして僕はふと気付いた。

「あれ。そういえば明日学校じゃん！」

そう思い、時計を見てみると針は午前三時を指していた。

「やべっ。早く寝なきゃ。」

そして僕は少し幸せな気分で睡眠した。

翌朝、起床すると眠い目を擦りながら、学校へと向かった。学校へ到着するといきなり安田が現れこう言った。

「おはよっ。昨日どうした？好きな子か？」

朝は苦手らしくあまりテンションは高くない。

「おはよう。あぁ、付き合ったよ。」

そう言うと安田は驚いた様子で聞いてきた。

「まじっ？！どんな子？この学校か？」

一気に安田のテンションは上がった。

「いや、その子失明して目見えない子なんだ。」

安田はさっきまでのノリが嘘のように問いただした。

「介護者かよ。まじかよ。やめとけって。自分も病気になるぞ。」

これは安田なりの冗談だった。動揺を隠すためのいつもの手段だった。

「うるせーよ。そんなこと俺らが言ったらだめだろうよ。」

そう言って二人で教室へと入った。すると教室の壁に一枚の張り紙が貼ってあった。

『定期健康診断のお知らせ』

と書いてあった。そこには期日が明日までとあった。

「おい、太一。今日、健康診断受けようぜ。なんか強制らしいし。」

安田とは珍しく同意見だった。

「いいよ。まぁどうせ何も異常ないだろうし。」

そして今日の研修の場所へと移動し、介護の講義を受けた。彼女と今後、心地よく付き合っていくためにも今日の議題には目を見張るものがあった。

『盲の介護法』

僕はいつもより真剣に話を聞いた。話に入り込むと時間はあっという間に過ぎる。昼は次の講義まで二時間ほど空いていたので昼ご飯を食べたあと早速、安田と共に健康診断を受けに行った。

この健康診断がのちに僕と彼女の歯車を狂わすことをこのときの僕はまだ知らなかった。

第十二章：違和感～ジレンマ

学校内にはとても綺麗な作りの医療棟がある。安田とともに学生証を持ち、そこへ向かった。この時間を利用して健康診断を受ける学生が多く、結構並んでいた。

「太一、お前健康優良児だから問題ないだろ。」

安田が少し笑いながら言った。少し待っていると自分の番になった。触診と問診を行い、レントゲン車へ移動し、胸部のレントゲンを撮った。

「診断結果は後日、自宅へ郵送となりますので。」

看護士の無感情な声とともに終わった。

「太一、案外早いよなぁ。なんか気になるよなぁ結果が。」

安田は気になるようだ。

「うーん。まぁ問題ないだろ。まだ若いし。」

僕はそう言うと、

「でも介護する側が体調悪いとなんかなぁ。」

確かにそうだ。安田の言葉に心から頷いたのは初めてかもしれない。自分たちは元気でいなくてはいけないんだ。そして今日も研修に明け暮れた。その後、三日間みっちりと研修をこなしていった。この一週間はとても充実していたように感じた。

研修が終わり日曜日。僕は彼女をデートへ誘った。待ち合わせ場所

は水族館へ行ったときと同じ駅前。少し待っていると母親に連れられて彼女はやって来た。

「ほら舞。太一くんいるよ。」

母親の声に彼女はすぐに反応した。

「太一くん久しぶり。行こうか。」

僕も彼女の姿を久しぶりに見て改めて、好きなことを実感した。今日は動物園に行くことになった。彼女の母親と別れを告げ動物園へと向かった。もちろん今日もビデオを持ってきていた。電車の中では優先席を譲る人はいない。でも僕は彼女の支えにならなくてはならないんだ。動物園に到着し、車椅子を借りて園内を回った。

「舞ちゃん、ほらキリンだよ。久しぶりに見たなぁキリンなんて。」

彼女は無言だった。僕はビデオを撮りながらもその言いようのない違和感に包まれていた。その後、一通り園内を回った。その間、彼女は無言のままだ。

そして休憩することになり僕は言った。

「舞ちゃん、一緒にジュース買いに行こうか。」

彼女はやっぱり無言で頷いた。ジュースを二本買いベンチに座った。すると彼女は突然話し始めた。

「太一くん、私…やっぱりキリンもライオンもお猿さんも目の前にいるのに見えなかったよ。」

初めて聞く彼女の悲しげな声だった。

「目を瞑っても何も見えなかった。記憶も薄くてわからないの。この目じゃもう見れないのかな？」

彼女はジレンマに襲われているようだった。僕はその答えを必死に探した。

「そんなことない。きっと見えるようになる。網膜のドナーは見つけやすいっていうし。」

その言葉は上辺を撫でただけだった。

「うん。ありがとう。でもなかなか私には合わなくて…」

僕は涙ぐむ彼女に言った。

「大丈夫。きっと見つかるから！そしたらまたここへ来よう。今度は本物を見よう。ねっ？」

僕が彼女に言える限界の言葉だった。

「うん。約束。そのときは太一くんといたい。」

僕は彼女のその言葉を裏切らないようにしようと誓った。

「今日はもう帰ろうか。お母さん心配するし。」

彼女が頷いて、帰ることにした。彼女を家まで送り届け、僕も帰宅した。

「あぁおかえり。学校からお前宛に手紙来てたぞ。」

ああきっとこの前の健康診断の結果だろう。そう思いその親展の封筒の封を開けた…

第十三章：告知～闇道

僕は今、東京の大きな大学病院に来ている。学校の健康診断で精密検査を受けるよう通達されたからだ。学校からX線写真を受け取り、今は病院の待合室にいる。私服から検査着に着替えさせられ、数々の検査を受けた。

「大袈裟だなぁ…」

僕はそう思っていた。そして全ての検査が終了し、帰宅した。家に帰ると珍しく両親が揃ってどこかへ出かける準備をしていた。

「ただいま。どっか行くの？」

何気なく母に聞いてみた。

「今、大学病院から電話があってご両親だけで来てくれって。なんだろうねぇ。」

僕はその時そのことがどんな状況なのかが全く理解できなかった。夜になり両親が家に帰ってきた。

「おかえり、病院からなんか言われた？」

僕のなんともない言葉に父は過剰な反応を見せた。

「んっ？ぁぁ…なんでもなかったよ。それより飯買ってきたから食えな。」

僕はその反応に少し違和感があったが、あまり気にしなかった。
そして翌日、再び病院から来るようにと言われ今度は両親と共に向かった。両親とどこかへ出かけるのは何年もなかったから戸惑った。
病院に着くと、すぐに４０代くらいの先生が会議室へと僕らを通した。名札には
「後藤」
と書いてあった。

「太一くん、こんにちは。昨日の診断結果を伝えますね。」
優しそうな声をしている。僕は黙って頷き、先生はＸ線写真を貼り付けて書類を机に無造作に置いた。

「太一くん、この肺の部分見てくれるかな？」
そう言われ、僕は目をそこへ移した。

「ここ…白い影みたいなのが斑点みたくなってるよね。これ腫瘍なんだよね。」
僕は何を言っているのか理解ができなかった。戸惑って両親の方に目をやると二人とも何も言わずに頷いた。

「太一くん、一応すぐに入院しなくちゃいけないね。」
僕は訳がわからなくて思わず聞いた。

「あの…これはなんて病気なんですか？」
聞いた瞬間に先生は血相を変えて行った。

「心して聞いてもらえるかな？」

僕は頷き心して聞いた。

「昨日、私も検査後すぐ調べてみたんだけど…これは扁平上皮のガン…つまり肺ガンです。」

僕は言葉を失った。その後、何を言われたのかさえわらないほどショックだった。

「でもこれは手術で取りきれるかも知れない。だから入院しよう。」

僕は従うしかなかった。その時僕は安田のある言葉を思い出した。

「介護する人間が自分の体調が悪いとなんかなぁ。」

その通りだ。

僕は少しずつ明るくなってきた自分の道が一瞬にして暗い闇になっていくのがわかった。もう僕は何もできない…

第十四章：病床～初夏の風

結局、その日はすぐ入院することになった。入院する前から咳は止まらなかった。ただの風邪だと思ってやり過ごしていた。

人間の身体は不思議なものだ。入院してからというもの妙に激しい頭痛に襲われる事が多くなった。病室の天井が回転しているのかと勘違いして痛みが少し引いたりする。それでも痛みのピーク時はそれは夜も眠れない程だった。

入院中のベッドの上はこの世で一番考え事をするには適した場所なのかも知れない。

小学生の頃、学級対抗リレーのアンカーに選ばれて、1位でゴールする寸前に肩に斜めにかかった襷に脚が絡んで豪快に転んだ時のこと。

中学生の頃、体育館の裏で先生に見つからないようにこっそり家にあった親父のクシャクシャのタバコを吸ってクラクラしたこと。

高校生の頃、交流行事で盲学校に行って「翼をください」を熱唱して、そのあと盲学校の生徒代表挨拶をした子の言葉が胸に突き刺さったこと。

その子のことが好きになったということ。

それはお互いに好きだったとわかったこと。

舞がこの世で一番大事な存在だと言うこと。

病気になったことを舞に伝えなきゃいけないということ。

寝るまでずっと舞に伝えなきゃいけない言葉を探していたんだ。

入院してから3日間は検査の嵐だった。

狭い狭いトンネルに寝かせられてガーガーうるさい機械に入れさせられたり、へんな薬を注射されてものすごい身体が火照ったり。

とにかく疲れた。

明日は検査の結果が出ると担当医が話に来た。

今日は寝よう。

考え事をしないで済むな今日は…。

翌日、両親と共に検査結果を聞いた。

病院の会議室は妙に閑散としていた。

無機質に並べられた長机と椅子がある。

その一つに担当医は座っていた。

「どうぞ、お座りください。」

無機質な空間に無機質な声が耳を突き刺す。

「それでは、太一くんの検査結果をお伝えしますね。」

無機質な声とは対照的に担当医の顔はとても柔和だった。

「やはり入院前にお話した扁平上皮には3〜4センチ程小さな腫瘍が見つかりました。」

やっぱりか…

「ただ手術すれば十分取り切れると思われます。ですのですぐとは申し上げませんが手術しましょう。」

母親は傍らで泣いていた。これは悲しい涙というよりは安堵感からくる涙だろう。

父親は僕の肩を掴んで首を縦に2回振った。

「とりあえず一度2日間だけ帰宅の許可を出しますね。手術はなさいますよね？」

僕はその質問をもう一度聞いた。それまでは気付かなかったくらい自分も不安だったんだな。

だって担当医のその言葉が耳に入らないくらい安堵感で包まれてい

たんだから。

手術をするかしないかの選択肢には悩む余地はなかった。

一時退院の許可を貰い安心した笑顔を残して両親は帰っていった。

退院は明日の午後になった。僕は久しぶりに外の空気を吸いたくなって病院の庭を散歩することにした。

人間の身体は不思議なものだ。

手術の恐怖よりもそんなに大したことがなかったという安心感からかどこも痛くなくなったように感じた。

外はもう初夏の爽やかさが包み込み柔らかい風が吹いていたんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3124a/

僕の姿が見えるとき

2011年1月28日06時54分発行